

【農は国の本なり】

第1部・越えろトヨタショック[1] <六次産業>雇用生む切り札に

2009年1月1日

雇用不安とともに幕を開けた2009年。「トヨタショック」は、工業製品の輸出で職と食をまかなう経済モデルを破たんさせた。働く



産地直送の食材に、連日行列ができる＝名古屋市中区の農場レストラン「風の葡萄」で

場を確保し、豊かな生活を維持するにはどうすればよいか。解くカギは農村にある。高齢化した農業に人材を投入して雇用の受け皿とし、急落する食料自給率を回復させる。「雇用を生む農業」へ、発想の大転換が問われている。

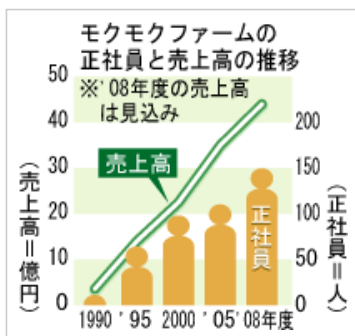
具だくさんの煮物や色鮮やかな季節のサラダ…。名古屋市中区栄の一等地に立つ商業ビルにある農場レストラン「風の葡萄(ぶどう)」。産地直送の食材をふんだんに使った1800円の昼食バイキングには連日、女性客を中心に順番待ちの長い列がのびる。

運営するのは、三重県伊賀市の農事組合法人「伊賀の里モクモク手づくりファーム」。1988年、地元の養豚業者ら19人で設立した。正社員約150人にパート、アルバイトを含め約520人の従業員がいる。大卒中心に毎年10人程度を定期採用しているが「人材はまだ足りない」。

「コメを売るな。おむすびを売れ」。そう話す社長理事の木村修(57)は元農協職員。「もう作るだけの農業では食っていけない」と痛感、生産者自らが作るハムやソーセージは全国区になった。米や野菜農家とも契約を結び、ブランド米「ごーひちご」や地ビール、パンなど付加価値の高い商品を次々に発売。おせち料理も手がける。

木村は従来の第一次に、第二次(加工)、第三次(販売・流通)を加えた“第六次産業”が農業の将来像と位置付ける。

この不況下でも売り上げを伸ばし、今年度は年商44億円を予想。そのうち農業体験型テーマパーク(18億円)、直営レストラン(12億円)のサービス部門が7割を占め、昨年11月には名古屋駅の高層ビルに7店目のレストランを出店する好調ぶりだ。



総務・経理マネジャーの篠原辰明(32)は6年前、農林水産省キャリア技官の職を捨て、モクモクに入った。

農政にあこがれて官僚になったが、実際の仕事は公共工事を予算化するための言い訳づくり。「省益が最優先で、農家にとって役に立つかどうかは二の次だった」

今は新事業の立ち上げや資金調達などに奔走する。一時は銀行の貸し渋りに遭い、自前の商品券を会員に購入してもらって経営難をしのいだことも。それでも

「農業が成長産業であることを証明したい」と目を輝かせる。

契約農家の収益も重視し「農協の買い入れより、2、3割高く買い上げている。生産者の生活が安定することで、安全な食材を安定的に確保できる」と木村は言う。

この3年で同社の正社員は40人増えた。全国的にも農業への求職は増えている。富山県では就農を希望する相談件数が昨年4月以降、前年比3割のペースで増加。大分市では製造業の相次ぐ非正社員の解雇を受け、農協が50人分の働き口を用意する。

工業から農業へ、人の流れの兆しはある。「マーケティングやデザイン出身者など、人材が集まれば、新たなアイデアが生まれ、活性化する」。木村は、雇用不安が吹き荒れる今を逆に「農業の時代到来」と期待する。＝文中敬称略

(第一部取材班・寺本政司、神田要一、太田鉄弥、福田真悟)

【農は国の本(もと)】唐の太宗が7世紀に編さんし、国を治める要を説いた書「帝範(ていはん)」にある「夫(そ)れ食は人の天為(た)り 農は政(まつりごと)の本為り」から日本に伝えられた。食が人民生活のよりどころであり、農業こそが国家運営の基盤と説く。

連載にご意見をお寄せください。

- ・〒460 8511 (住所不要) 中日新聞社会部「農は国の本なり」取材班
- ・ファクス 052(201)4331
- ・Eメール shakai@chunichi.co.jp

Copyright © The Chunichi Shimbun, All Rights Reserved.